

## Ⅳ 演出技法によるプレゼンテーション能力発揮度のちがい ——仮説の検証実験 2——

### 1 実験項目および実験の方法

高 津 直 己

本報告書のⅠでわれわれは、ストレートトーク番組におけるプレゼンテーション能力の発揮度を高めるためのいくつかの仮説を提出した。本章では、Ⅱで作成した「プレゼンテーション能力測定尺度」を使って、演出技法にかかわる仮説検証実験の報告をおこなう。

演出技法のちがいによってプレゼンテーション能力の発揮度に変化が出てくるとすれば、そこからプレゼンテーション能力を高めるための一般的な指針を見いだすことができるかもしれない。また、個々の話者（放送講師等）の発揮度を高めるための、いわば「診断」の手がかりを得ることもできるだろう。

#### (1) 実験の項目と方法

プレゼンテーション能力発揮度のちがいを検証するために、われわれはさまざまな演出技法のうち、以下の二つのアプローチのし方で実験をおこなうことにした。

##### 1. 演出上の工夫

スタジオで番組を収録するときの「演出上の環境設定」を変えることによって、話者のプレゼンテーション能力発揮度にどのようなちがいが現れるかを調べる。

##### a. 「立ち」と「座り」

話者（放送講師等）が立って話す場合と座って話す場合との比較である。放送大学番組の収録時には座って話をすすめることが多い。「座り」では放送講師が座席に座り、そばに置かれたパターン（図表）を差し示しながら、いわゆる「紙しばい」方式で講義をすすめる。それに対して「立ち」では、パターンをホワイトボードに並べて張り付け、講師がその側に立って講義をすすめる。いわば「美術館」方式である。

この場合には、一般的に「立ち」の方がプレゼンテーション能力を高める効果があるのではないかと予想される。話者は立つことによって体の自由度が高まるとともに、パターンを使った説明でも任意の順序で解説・説明が可能である。つまり講師にとっては、「立つ」ことによって「座り」の場合よりも「講師主導型」にちかい環境が与えられると考えられるからである。

##### b. 「ツール操作」

番組進行上の素材（パターンやVTR映像等）を話者自身が操作する場合としない場合の比較である。放送大学番組では、こうした素材のツール操作に放送講師が直接タッチするこ

となくすすめられている。多くの場合、台本上で用意された順序にしたがってアシスタント・ディレクターや、講師から離れた副調整室のディレクターが操作している。これに対して検証実験では、素材であるツールの操作を講師自身にまかせて、直接操作をすることによって講義をおこなってみる。ただし「座り」の状態をベースにする。

この場合も前項の「立ち」・「座り」の場合と同様に、「講師自身によるツール操作」の方が「講師主導型」にちかい環境が与えられると考えられるので、「講師自身によるツール操作」はプレゼンテーション能力を高める方向に作用するのではないかと予想される。

## 2. 出演者自身の工夫

スタジオで番組を収録するときの「出演者本人の心構え」を変えることによって、話者のプレゼンテーション能力発揮度にどのようなちがいが現れるかを調べる。つまり演出者側からの条件設定ではなく、出演者自身の構え・工夫によってちがいが出てくるかどうかを調べていくことになる。

### a. 「台本の工夫」

話者が話す内容を台本上にぎっしりと「書き込む」場合と「メモ程度」の要点主義ですすめる場合との比較である。放送大学番組制作の場合は、一般的に放送台本に講義内容全部を文章化して書き込むことはすくない。ほとんどの場合、要点だけを記入した形式をとっている。しかし放送講師によっては、これに加えて、講義内容すべてを文章化した原稿を用意して番組収録に臨む場合がある。このような「書き込み原稿」を使うか、使わないかが、プレゼンテーション能力の発揮度にどのように反映するのか調べていく。

この場合には、「書き込み原稿なし」の方がプレゼンテーション能力を高めるのではないかと推定される。Iで村松が報告しているように、放送大学番組の視聴者の多くは、原稿依存型の講義をあまり高く評価していないからである。

### b. 「聴衆のイメージ」

話者が対象である聴衆のイメージを抱いて話す場合と、とくにイメージを抱かずに話をする場合との比較である。ストレートトーク番組の収録時には、聴衆が目前にいることはほとんどない。放送大学番組の場合も同様である。スタジオで放送講師の前にいるのは「聴衆」とは意識できないカメラマン等のスタッフだけであって、講師としては誰に向かって話をするのか、心構えが定かでない。こうした状況に対して、講師自身があえて「聴衆の存在を意識」しながら講義をすすめてみたらどうなるだろうか。

スタジオという特殊な環境の中でこのような実験をおこなうのは、講師にとってむずかしい注文かもしれない。しかし実験してみる意義はある。

## (2) 実験番組

検証実験は、上記のように「演出上の工夫」と「出演者自身の工夫」の二つのアプローチでおこなうことにした。

実験番組の収録は、平成8年度制作の放送教育開発センター研究開発番組（テレビ）8科目の中から、放送講師の協力を得られた下記の4科目・6名の講師の番組でおこなった。また、平成7年度におこなわれた共同研究「講師にやさしい演出技法の研究」で収録した2番組も研究対象として採用した。

1. 平成8年度制作番組： 自然の理解・専門科目「生命と物質」  
 社会と経済・専門科目「経済学史入門」  
 人間の探求・専門科目「日本語教育概論」  
 共通科目・一般科目「心理学入門」
2. 平成7年度制作番組： 自然の理解・専門科目「生物有機化学」  
 自然の理解・専門科目「動物の行動と社会」

実験項目と番組名、講師名の関係は次のとおりである。

実 験 項 目		実 験 番 組 名	講 師 名
演出上の工夫	「立ち」と「座り」	「生物有機化学」	O 講師
		「日本語教育概論」	M 講師
		「経済学史入門」	N 講師
	ツール操作	「動物の行動と社会」	S 講師
		「生命と物質」	N 講師
出演者自身の工夫	台本の工夫	「生命と物質」	K 講師
		「心理学入門」	A 講師
	聴衆のイメージ	「生命と物質」	N 講師
		「生命と物質」	Y 講師